
坂路

葉月瞬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

坂路

【Nコード】

N2221D

【作者名】

葉月瞬

【あらすじ】

かつて少女だった女性は、少女だった頃に遊んだ友達の記憶を封印していた。ひょんなことからその記憶が思い出され、少女だった頃を懐かしむ。

坂は空への入り口だ。

誰かがのたまった。誰だっけな。覚えていない。遙か遠い記憶の淵に浮かぶのは、黄色い麦藁帽子と笑顔が輝いている白い顔だけだ。白い顔。

目鼻立ちなんて細かい部分、覚えていない。もしかしたら、本当に目鼻立ちが無かったのかもしれない。それが男の子だったのか、女の子だったのかすらも胡乱だ。その子に関する記憶は楽しい事ばかりで、だから坂は好きだ。坂の下から上を見上げると、本当に空への入り口みたいで見えているだけで楽しくなってくる。

その子は何処へ行ったのかな。ひよっとしたら本当に、坂から空へ行ってしまったのかもかもしれない。気が付いたらいなくなっていて、いないという事実が当たり前で、その事に関して何も考えずに生きてきた。

いつの頃からか、坂を見上げるのをやめてしまった。

その子がいなくなってからなのか、それとも大人になってからなのか。その子がいないという事実は、私の胸にぼつかりと空虚な虚^{うつろ}を作り出したのかもしれない。

坂は空への入り口だ。

今ならそう、信じられる。この事を突然思い出したのも、そう、何か理由があるはず。それは失恋した次の年にやってきた。急に頭の中に閃いて、思い出がそれに重なって、ある種の確信を得た。そう、坂は空への入り口なんだ。

「ちゃん。君にだけ教えてあげる。君は特別、だからね」

フツツ、といったもの笑顔を煌かせて、白い顔の子は言った。誰もいない時。誰もいない場所で。

大人たちは皆、この子の事を見ることが出来ないらしい。誰も見

えてるようには振舞わないし、話しかけようとしもない。存在自体を無視しているのか、存在自体が無いのか。でも、私にとっては親友以上の存在なのだ。何処へ行くにも一緒。何をするにも一緒。ひよっとしたら、兄弟以上かもしれない。

その子は、気が付いたらそこにいた。何処から来たというでもなく、気が付いた時には一緒に遊んでいたのだ。

「絶対、誰にも秘密だよ。秘密の場所」

そう言って連れて行ってくれたのは、あの坂道だった。その坂路の下から上を見上げて、あの言葉を言ったのだ。「坂は空への入り口なんだ」と。その言葉を受けてか、坂の下から上を見上げてみると、なぜだか空が輝いて見えた。まるで、そう、秘密の入り口が口を開けたかのように。目の錯覚かと思いい目を擦ったが、まだ輝いて見えた。

その時は気が付かなかつたけれど、そのキラキラは空への入り口だったの。あの子が私を連れて行きたかったのは“空”だったのよ。その子は振り向いて私に微笑を投げかけると、ステップを踏んで坂を上って行った。

「ちゃん、あそこだよ。さあ、早く行こう。早くしないと閉まっちゃう」

そこは空への扉。どうやって開いたのかは解らないけれど、そこを潜ると誰も知らない世界にいけるらしい。そこは異界。この世界と対になっている、隣り合った世界。綺麗な場所なんだそうだ。まるで万華鏡のような。否、もっともつと綺麗で華美で素敵な場所。その場所を一度でも覗き見たなら、忘れられなくなり、その場所へ行きたくて仕方が無くなるという場所。

異界。

私は、生唾を飲み込んだ。

そして、あの子の後を付いていく。

そして、

坂から空に、吸い込まれた。

そこには、何処までも抜けるような蒼穹が無限の広がりを見せていた。蒼穹と地平線が出会う場所ではキラキラと何か、水晶のような透明な何かが幾重にも重なって煌いていた。まるで、万華鏡のような。

そこは紛れも無い、異界だった。“空”は空であり、この世ではない場所。異界。

私達はそこで、時の移り変わるのも忘れて遊び呆けた。そこでは始終ずうつと青い空が広がっていて、時間の経過が無い様に思われた。外の世界で時が移り変わっているのも知らずに、ずうつと、飽きるまで白い子と共に遊び戯れた。そこでは何か、欲しいと思ったものが直ぐに出てくるので、遊ぶものに困ることは無かった。

遊び疲れて、“空”から出ると、夕暮れ時だった。茜色の雲が棚引いている。

後で知ったことなのだが、私は三日間行方不明となっていたのだそう。三日間何処へ行っていたのか、という母の質問に、私ははにかむしか出来なかった。

私は、それ以来その子と会っていない。

そして、いつからか私は、坂と“空”を捨てていたのだ。

そして今、やっと思い出した。大切な、一番大切な思い出を。

坂は空への入り口だ。

今ならそう、信じられる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2221d/>

坂路

2011年1月16日04時06分発行